

2014年(平成26年)8月15日

金曜日

13版▲

石川

22

製造、爆撃逃れ地方へ

実家で昔…突き止めて

工場は いま

戦後
69年

時折、小松基地を離着陸するF15戦闘機の轟音が響く。JR小松駅から車で10分。小松市大領中町は、車道を挟んで保育園や民家が立ち並ぶ住宅地だ。自宅脇にある畑を指さして、丸谷幹郎さん(69)が言った。

「この場所に、かつて航空機の製造工場がありました」



丸谷憲二さん

旧中島飛行機に関する資料や文献によると、小松市だけでなく、加賀市にも協力工場が複数あったとされる。だが、詳しい記録は残っていない。



自宅が戦時中に軍需工場だったことを突き止めたのは、幹郎さんの弟の憲二さん(67)＝岡山市＝だ。2008年10月、憲二さん

つていない。

◇ ◇

んは、入院中の母親を見舞うため、岡山から小松に帰省した。実家の棚を整理したところ、古い業務用封筒1枚を見つけた。裏には「小松航空機製作所」と記されていた。印字された番地は、実家の住所とほぼ同じだった。

「自分のルーツを探したい」という思いから、使命感が生まれた。調査を始めた。

実家は家具などをつくる木工所だった。経営者は父の八郎さん。記憶をたどり、2階の事務所にあった飛行機の模型を思い出した。木工所は数年前に取り壊したため、残存する記録はない。それでも、岡山で民俗学会員だった経験もあり、資料の調査は得意だった。約1カ月間、図書館にこもった。



上 航空機製造工場跡を指さす丸谷幹郎さん。いまは家庭菜園として野菜を育てている。小松市大領中町

下 墨で塗りつぶされていた跡を指さす北川昇三さん。小松市八日市町

手がかかりが欲しかった憲二さんは、いどこに連絡を入れた。小松市内で玩具店を経営する北川昇三さん(74)。北川さんの義父の清八さんと八郎さんは親戚関係にあり、木工所は戦後、清八さんが八郎さんに土地と一緒に譲った経緯があった。

北川さんは憲二さんの依頼で、自宅に保管していた古いアルバムを取り出し、2枚の集合写真を見つけた。木造の建物を背景に、軍服姿の清八さんと八郎さんを含む、男女計56人が写っていた。

ところが、北川さんはあることに気づいた。建物に掲げてあった3枚の看板。写真の上から墨で塗りつぶされていた。水で丁寧に消すと、「有限会社小松航空機製作所第二工場」「第一軍需工廠第三製造協力工場」などの文字がはっきりと浮かび上がった。

(小川崇)

朝日新聞石川版 戦後69年 軍需工場はいま

平成26年8月15日 3 『軍需工場はいま・ 製造、爆撃逃れ地方へ』

平成26年8月15日 4 『軍需工場はいま・ 黒塗りの下事跡の念』

平成26年8月25日 10 「武力解決国を滅ぼす」 山村勝郎・金沢大名誉教授（89）語る
～＊記憶ますます重要に＊～

なぜ空襲を免れた金沢で不発弾が見つかるのだろう。そんな疑問から始めた取材で、石川でも多くの民間人が、産業分野で戦争に関わっていることを知った。訪れた小松の玩具店は戦時中、航空機の部品工場になっていた。店を経営する男性の父親は戦後、多くを語りたがらなかったという。工場の前で撮った集合写真も、軍需工場だったことを裏付ける看板の部分が黒塗りにになっていた。直接的ではないかもしれないが戦争に関わった人たちの、心情の一端だと感じた。来年、戦後70年を迎える。当時を知る人たちの記憶がますます重要視されている。「いまだからこそ、重い口を開くときだと思う」。自宅が軍需工場だったことを突き止めた男性の言葉が印象に残る。戦災がなかったといわれる石川でも、証言や過去の記録から学ぶ意義は、間違いなくある。

（小川崇）

